

と 二 夢 久 竹

ミ ス デ ン ト ン



堀 内 清



ありし日の竹久夢二（明治43年・京都の堀内氏宅にて）

んで登山したのであった。

はからずも私はその団員の中に「竹久夢二」と名札をつけた芸術家タイプの青年を発見し、これがその当時中学世界その他にコマ絵を出して有名であった夢二であることを確認し、登山中ほとんど終始話し相手としてその道中を楽しんだのであった。

彼は当時二十六才、極めて静かな性格、無口で人なつこい、小がらな色のくろい青年

であった。

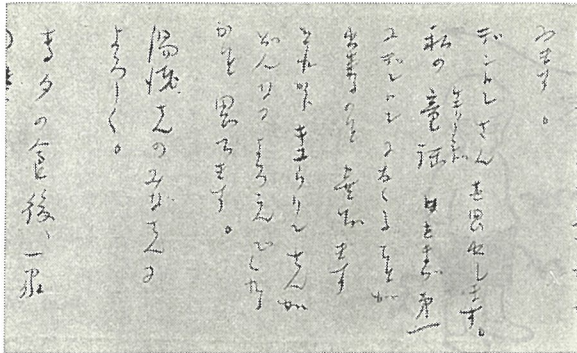
登山の三日間、同行者たちの友情は同信の親しさに加えて誠に愉快なものであった。私は後日、夢二からもらった彼の「流人スケッチNo.6」の一冊、数多くの俳句と登山スケッチの数十点が、誠にすばらしい記録として、いつまでも私の書齋に家宝として保存されていることを感謝するものである。

翌朝、私は御殿場の彼の仮宿を訪ね、そこ

明治四十二年（一九〇九年）七月十八日、酒井勝軍氏が主宰されていた讚美奨励会の主催で、富士山頂における讚美礼拝の計画があり、当時、同志社普通学校在学中であった私はこれに参加したのであった。約三十五名の有志が全国から集り、「一九〇九年七月」「富士山上礼拝参加章」のたすきをかけて喜び勇

ではしばらく彼とコマ絵やスケッチ談を楽しみたまきさんとも話し、誠によき思い出の一つの時をもったのであった。

明治四十三年（一九一〇年）の春、彼は私の招きに応じて初めて京都を訪ね、私の上出水の家にしばらく滞在したが、古都の風物は彼の心に何物かを強く印象づけたのであった。



3mにおよぶ長い手紙（堀内氏宛・大正2年）

この旅行から東京へ帰った彼は、明治四十年七月十九日に初版で夢二画集第四「旅の巻」を出したが、そのなかの末節に次の言葉が出てくるのである。

昨夜は清さんのおつ母さんの同志社女学校時代の寫眞を見せて貰った。それよく僕等の姉が結った、前髪をおろして、綱に入れた束髪ね、あれを結って、襟をすこしついて、しつとりとした恰好は、女大生と聖書を加へて二で割ったような感じがして好きだった。おつ母さんは睫毛の長い眼でちつとこう思入つて物を言われる。花壇に面した座敷で夕餉をしながら、僕にもこんな母刀自があつたらこつと「家」を呪ふ男にはならなかつたらうと思つた。けれど今更どうなるのではない。

またしようとも思はぬ。いつまでも、帰るべき家を持たずに旅から旅へと流浪してゆくストレンジャーでいるより外はない。

木村（清松）牧師を訪ねた。この人に逢ふといつても強い刺激をうける。どうかして南洋へ行きたいと考える。いつかの絵で見たセイロンのあの強い外光を受けた壁と、行人の着てゐる赤や青の花や、頭へ巻きつけた黄いろ

布きれを思い出して、旅がしたくて堪らなくなつた。

二

彼の滞在中、私は彼と二人で私の友人知人を訪ねたが、なかでもミスデントン訪問は度々であり、お互が芸術談を楽しんだのであった。彼の英語もミスデントンの日本語と半分半分で充分に意志の疎通が出来て、われわれの話題も楽しく進められたのであった。ことに子供の画や童話等には共通したものがあり、彼の異国趣味の物語りも、とても共感をそそったようであつた。前述の「旅の巻」の巻末にある次の一章を忘れることが出来ないのである。

京都でミスデントンが逢いたいといふのでその夜大急ぎで訪ねた。彼女の家は同志社女学校の構内にある。オーガンの音が、白いカーテンのうちから響く。窓の光は庭の木立にちらちらと流れて、僕等の洋服の肩へと落ちた。デントンはゐなかつた。デントンの許に来てゐるミスハイドと云う美術家に逢つた。この女は、日本へ錦絵を習ひに来てゐるんだ

って。かいたものを見せて呉れたが、おかしなものだった。錦絵といへば、この間清さんの家で彦根屏風の寫眞を見せて貰った。日本にもあんなエライ画工がゐたかと思ふと、心強くなったよ。そりや、境遇が異つてゐるから、シャバンヌやロセッチなどは趣きが異ふが、僕等の胸にもしみじみと触れる。ミスデントンに僕の絵を見せると、シンブルラインのスケッチが好いといつた。僕はアメリカへ行くつもりだと言つたら、錦絵のある日本



鼻の平さん
鼻の平さん何處行くの。
おいらの鼻のむいた方。
鼻の平さんは髪者。
まつすぐ歩いたことがない
それもそのはず平さんの
鼻はいつでも曲つてゐる。

マザアグウスによる「鼻の平さん」（青い船）より

を捨て、アメリカへいかなくても好いだらうにと言つた。彼女の芸術は狭い意味の趣味に過ぎないらしい。

後日（大正二年夏）彼が私に認めた長さ三メートルほどの長い手紙のなかに、次の一節が認められてある事も興味ある事実である。

デントンさんを思い出します。私の童謡チエリーランドをまつ第一にデントンにおくることが出来るのを喜びます。それからキュウリンさんがどんなによろこんでくれるかを思います。

（註 キュウリンさんはボストン博物館長で当時来朝中に京都岡崎の京都図書館で開催中の夢二展に來会され彼に渡米をすすめた人）

夢二渡米の実現は、昭和六年であり、五月七日秩父丸でホノルルに向い、三週間滞在、龍田丸で五月二十

九日桑港着、念願のアメリカに彼は最初の外国生活を過ごしたのであった。風土の変化と身心の疲労が彼に絶体休養を要求したので、加州パイントラバスの小谷氏宅で静養。その間カーメル画廊、教育会館ビル、オリンピック・ホテル等で個展を開催。

昭和七年の正月はロスアンゼルスで迎え、アメリカ東部の旅行も断念して、サンピドル出帆のドイツ汽船タコマ号にてパナマ運河經由、キュラソウ港より一路欧州へ、フランス、ベルギー、オランダ經由、十月十日ドイツのハンブルグ着、欧州各地を訪ね、翌昭和八年九月までベルリン滞在、九月靖国丸にて帰国、神戸に上陸、年末に台湾に赴きしも直ちに帰国、病弱著しく静養。これが彼の海外旅行の全般である。

三

夢二は一般にひろく「夢二式の女」を主題とした抒情絵画を専ら特徴とする作家と知られていたが、一方また、子供の画についても他の追従をゆるさない、親しみと愛着を覚える優作が多く、また多くの児童誌に先覚者として、その存在を認められていた事は明白な

岩倉の昼と夜

高橋哲郎



日本中のすべての場所が、高度経済成長という掛声の中で、大きく変貌をとげつつあるように、「岩倉」もこの数年の間に大きく変ってきたし、今なお、その変化は進行中である。古い京都人が岩倉という言葉の中にえが

そえることになった。ちなみに、国際会議場、すなわち国立京都国際会館の所在地は、同志社岩倉学園の大部分と同じ町内になる岩倉大鷲町である。従って、現在の岩倉の特徴を一言でいいあらわすことも、また岩倉の昼と夜

くイメージは田園と精神病院の村であった。その面影は完全にぬぐい去られたわけではないが、同志社岩倉キャンパスは大きく発展したし、住宅街としても面目を一新しつつある。また、岩倉の南端に国際会議場がつくられたことも、岩倉に新しい特徴を

とを語るのに、それらのどれに焦点をあわせたらよいのかも大変に困難である。多少ピンボケになるかも知れないが、私はそのどれにもとらわれないで、気のおもむくままにペンを走らせてみた。

*

太陽が比叡山の肩から顔を出す頃になると、叡電から吐き出された学生の群が、一群、また一群と、道一杯にひろがって、東から西へむかって流れはじまる。同志社高校の学生たちが登校してゆく行列である。やがて、同志社高校のチャペルから、スピーカーにのつた前奏曲が、朝の礼拝の開始を告げ、学園の町、岩倉の朝がはじまってゆく。

岩倉は学園と学生の街である。少くとも、南半分については確実にそういうことができる。岩倉を構成する八つの町のうちの二つの町（大鷲町と忠在地町）の大半は、同志社高校と、同志社大学の二つの学寮（大成寮と壮園寮）と体育関係の諸施設、同志社大学総合グラウンドの北側にある洛北中学校とで占められている。朝の登校時や放課後にはどこにいても学生に出会わないことがない。岩倉にはいつも学生らしい活気があふれている。

放課後のグラウンドからは、陽が傾くまで、運動部の選手たちの練習の喚声がひびきわたってとだえない。ある皮肉な教師はその著書の中で、この喚声のことを「猛獣が吼えているというよりは、オットセイの池の中にがちようがいつしよにいて、まえがコヨテの檻で、となりがゴリラで、それらがいつせいに鳴いたり叫んだりするとあんな音になる」と表現したが、それほど大げさではないにしても、あの喚声は高校のグラウンドなくては聞くことのできない独特のものである。特にやかましいのは野球部である。広い野原にただ一人、いつ飛んでくるのかわからない球を待つ孤独にたえかねて、われとわが存在を確認し、人にも呼びかけている吼え声なのであるうか。陸上競技の選手たちはだまって走っている。喚声のあるなしにかかわらず、グラウンドにくりひろげられているものは、若いエネルギーが泥だらけになって走りまわり、ぶつかりあっている姿である。

若さを感じるのには運動部の練習からばかりではない。休憩時間に、よく整備された高校の中庭の芝生の上には、何の屈たくもなく、三々五々と腰をおろした生徒たちの姿が見う

けられる。本を開いて読むもの、校内放送が流す音楽に耳を傾けるもの、談笑に興ずるもの、さまざまであるが、それらの男女生徒の姿は平和であり、明朗そのものである。運動部の練習の中に爆発する若いエネルギーがあるとするならば、こんなときの生徒たちには、何の束縛もつけずに若さを享楽している青春のもう一つの姿がある。

「チャペルの横のつじの木が素晴らしい。岩倉で一番嬉しく思うのは、木々が自然の雄大さを、そのまま、表現するように伸び伸びしているということである。再び『岩倉はいいなあ』と思う。」と、ある生徒はクラス日誌にしている。たしかにその通りである。岩倉ですべてが伸び伸びとしている。木々、そして生徒たちも、また教師たちも……。

*

岩倉のすぐ東には、比叡山がその英姿を高くかまえて見おろしている。そして、比叡山からはじまって、北へ鞍馬、貴船、そして高雄と、幾重にも重なりあいながら起伏して続く峯々で三方を囲まれ、南にも宝ヶ池の丘陵をひかえた岩倉は、京都盆地の北はずれに、また一つの小さな盆地を形づくっている。ち

ょうど京都盆地を圧縮したような形になっている。古くから京都は山紫水明の都だというのが、岩倉に住んでみると、その感じはひとしお強い。三方をめぐる山々の緑と、田畑の作物の生育の様相や、何げなしに咲いては散ってゆく野草の花の変化等から受ける四季感の新鮮さは、岩倉の生活から得る貴重なものの一つである。

同志社高校はまわりの自然が美しいだけではない。学園全体がまわりの自然に調和するように美しく設計されている。だから、よく晴れた日に国際会館から同志社高校を望んだ風景は、実に素晴らしい。グラウンドをへだてて、白い本館、チャペルの赤い屋根、グレイの校舎、横に大きくひろがった体育館等が整然と並び、その真中に太く通ったボブラ並木、校舎の間を埋めている木々の緑……、それらは一幅の絵のようである。

高校の建物が、どれも個性的で、まわりの自然と調和しているのと対象的なのが、大学の体育館と、大成寮の煙突である。ただ建っていればいいという感じで、まわりの自然に挑戦するように黒い図体をかまえている体育館は、何とも不恰好であるし、同志社キャン

パスと住宅街とのちょうど境い目に立つて長い煙突は、自然との調和とか近所迷惑とかにおかまいなく、冬になると黒い煙を吐きつけている。それらはアカデミーの重みとか、体面などはかなぐり捨ててしまったマスプロ教育の本質と悲劇とを、岩倉キャンパスの一角に象徴しているかのようである。

*

山に近いだけに岩倉の夜は早く訪れる。学生たちが練習を終えてグラウンドからひきあげると、真赤な太陽が西山に沈んでゆく。その後に来る岩倉の夜は静かであった。聞えてくる物音といえば、夏になると蛙の鳴き声であり、冬の空にこだまするものは犬の遠吠えぐらいであった。大成寮等から学生たちの元気の良い声が、ときたま聞えてくるのがあったが、それとてもやかましいというほどのものではなかった。自動車のクラクションの音も、減多に聞くことはなかった。今、小学校の二年生になる長女が三才のときのことであったから、五年前の話であるが、夏休みに家族をつれて帰省したことがあった。私の生家は宇都宮市の町はずれにあるのだが、近くを日光街道が通っていて、自動車の流れが、終

日にわたつてとだえない。次から次へと来るいろいろな自動車が、長女には大変珍しかったのであろう。ひまさえあれば、父や母にねだつて、街道の端までつれていってもらい、あきずに自動車を眺めていた。そんな長女を、母たちは「この子は京都から来たというのに、自動車をみたこともない田舎からでもやつてきたようだよ」といつていたが、その頃の岩倉ではそんなに自動車をみるのが少なかった。その頃からくらべれば、岩倉でも、自動車の交通量はずいぶん増加したし、夜の騒音も大きくなっている。しかし、それでも、京都の旧市街に住んでいる親戚のものたちが遊びにくると、岩倉の夜はさびしいくらいに静かだという。

夜の岩倉に情趣をそえるのは、夜の比叡である。星空をバックに黒い姿を大空にそそりたせた比叡山は、昼間見るときよりもずっと近くにあるような感じがする。山頂の航空灯台の赤い灯は、何かをささやくように美しく輝いている。しかし、それは春と秋の話で、夏には、納涼をあてこんだ山頂のレジャー施設とケールカーの灯が、終夜まばたいているし、冬になれば、蛇ヶ池のスキー場のナイ

ターのライトが、山の肩のあたりを青白く照らしている。それらの光景も、また、春秋におとらず絶妙である。

私が岩倉に住みはじめた頃（九年前）は、この叡山の航空灯台をめざして飛んでゆく日航の定期便が、夜十時になると、必ずといってよいほどその爆音で、障子やガラス戸を振動させたものであった。しかし、それも、国内線にまでジェット機が使われ出し、計器飛行がおこなわれるようになった頃からか、あまりきかなくなつた。

*

岩倉の夜の静けさをかき乱して、最近の話題をにぎわしたものに、宝ヶ池のサーキットがある。サーキットの騒音や彼らの蛮行の実態については、おおいにマスコミが報道してくれたので、私がここでくりかえすまでもないと思う。サーキットがおこなわれた場所と、グラウンドを一つだけ距てて建っている同志社高校キング寮の寮生たちの迷惑は、特にひどかった。あれが最高潮に達した五月の連休の頃には、寮生たちは勉強はおろか、眠ることもできないぐらいであった。岩倉の住民としても、キング寮の寮務主任としても、私

はこのサーキットには甚だ迷惑をしているのだが、それでも、あの若者たちに心の底からの怒りを感じることはできない。ひしめきあうビルと、その谷間の道路にあふれる人と自動車、洪水が象徴する都心や、規格化されて個性などというものは少しも感じられないサラリーマン住宅が並んでいる郊外住宅地にくらべて、コンクリートをふんだんに使い、校倉造りを模して建てられた国際会館と、グリーンベルトを真中に引いて、白い補装道路が田んぼの中を東西に走っている宝ヶ池から岩倉にかけての風景とでは、同じ人間がつくり出したものにしても、あまりにも差が大きい。

後者は人工のものではあっても、自然の美と調和し、新鮮で、スケールが大きい。若者たちがここで解放感を味わい、エネルギーを発散させようとしたのは当然であった。私が若者たちを怒れないのは、彼らにこのような場所、このような仕方、若いエネルギーの発散を許さない社会の現実こそ問題だと思っただけである。私の感傷かも知れないが、責任は彼らではなく、社会と大人たちにあるのではないだろうか。国際会館近辺のスケールが大きく、解放感をそそるのに十分だと私

は思ったが、それも、ごみごみしたわれわれの生活との比較に於ける話であって、日本を占領している米軍基地の広さ、軍用飛行場の滑走路の長さ等からみれば、くらべものにならないくらい小さい。

私はパトカーに追いかけて逃げまわっている彼らの爆音を聞くたびに、

「戦後の青年は、戦争というもつとも重要な事件から少しも影響をうけなかった。かれらには戦前と戦後との対照が体験としてなかった。かれらの行動は能率的で、体力にはすぐれていたが、内的生活は空虚であった。かれらに悩みは何もなかった。経済・技術・スポーツがかれらの興味をひいた。かれらは問題をもたず、世の中を改革したいとのぞまなかつた。かれらは生きたいと願った。オートバイが彼らの野心の体现であった。それは彼らの動的なリズムに適合した。戦後流行した競技の中でもスピードのある競技がかれらの間で人気があった。この世代は指導者たるべき世代ではなく、流れに投げ込まれば堰を切つてまで流れる流木のようなものであった。かれらはどのような政治革命にも動員されう。」

本を傷つけず 永く保存するために

「同志社時報」

合本ファイル

お申込みは

同志社時報編集部

定価200円〈送料65円〉

という、ノイマンの「大衆国家と独裁」の一節を思い出すのである。この文章は現代の青年のことを書いたのではない。第一次大戦後のドイツの青年属がナチスを支持し、ヒトラーのもとに第二次大戦に突入していくことについての分析を行なったものの一部である。サーキットに群がる青年の中に、私たちは、現代日本に於ける「流木」の姿を見なければならぬのであろうか。

（高校教諭・理科）

ブラジル植民の先駆者

古谷重綱翁の長逝を悼む

大橋 憲太郎



在ブラジル同志社校友の大先輩、古谷重綱翁が九十二歳の天寿を全うして、去る六月十三日長逝された。翁は去る五月二十八日皇太子ならびに妃殿下ブラジルご来訪の際、パカエンブーにおける邦人歓迎会式場で、不自由な身を高齢者席にて車椅子にある翁に両殿下は親しく御握手を給うて、その健康を祝される光栄に浴したのであったが、その後、老衰

のれめ眠るがごとく大往生を遂げられました。

翁は一八九五年同志社普通学校を卒業のち、米国ミシガン大学に学び、帰国後、外交試験に合格、外交官生活に入り、カナダ・オッタワ総領事、米国外交官参事官、本省通商局長、メキシコ駐在特命全権公使を歴任、一九二六年アルゼンチン公使となり、パラグワイ、ウルグワイ公使を兼任され、功により従三位勲二等瑞宝章を授けられた。帰朝命令によって外務次官に内定の由知るに及んで、当時の軍人・内閣と相容れないことを悟るや翻然として外交官生活を引退、かねての希望であった南米植民、特にブラジル植民を決心され、一九二八年渡伯、サンパウロ州海岸地帯においてバナナ園経営に着手された。当時

はカフェーの不況時代であり、またバナナはまだ世間においてあまり重要産物視されていなかったにもかかわらず、将来の発展を予想されたのはさすがは翁の先見であった。現在はその経営を甥の古谷綱雄氏に任せ、老後はサンパウロ市内の閑静な住宅地に悠々自適の生活を送って居られたのである。

翁の外交官生活も長く、多くの外交秘話は歴史的にも尊重せられ、わざわざ外務省から出先総領事を通じてその経験談を録音されるよう通達があり、充分の完成を見ずして逝かれたことはかえすがえすも遺憾な次第である。と総領事の弔辞の中にも読まれたほどである。

また翁の在伯中における功績はすこぶる多く、その主なものとして、ブラジル・サンパウロ州におけるジナナ栽培とその輸出に貢献されたことである。翁は輸出組合の組合長として政府および業者間に東奔西走、ついに今日の輸出産業の基を築かれたのである。つぎに旧伯文化協会が創立せられるや第一期委員長として自らサンパウロ法科大学内に文化講座を担当され、得意の英語、ポルトガル語およびスペイン語をもって日本文化の講演に努

め、学生の中から幾多の親日家を輩出、今日すべて社会の中堅として日伯親善の基礎を築かれたと言っても過言ではありません。

一度、日伯国交流絶となり、ブラジルまた連合国側に加入に際し、翁は交換船にて帰朝の機会があったにもかかわらず、ブラジルを永住の地として他の日系移民と運命を共にする決心をせられ、特に戦時中に次々に起った圧迫に対してよく忍び、かつ日本人移民のために尽瘁せられたのである。終戦当時、同胞間に勝利組と敗北組の紛争が起るやその和解のため立ち上ったが現地はいわゆる特攻隊に狙撃され、九死に一生を得られたのもその当時であつた。不幸数人の人材が凶弾に仆れたことは邦人移民史の汚点として忘れることはできない。

また在伯同胞救済を目的として同仁会の組織せられるや、その理事長として、不幸開拓半ばにして病魔に倒れる人々のため日本病院の建設に尽力、現在においてもサンパウロ市において有数の病院と言われている。

こうして数えるに救済の暇もないほどで、翁の長逝に際して、その埋葬墓地に関しては特に日系議員によりサンパウロ市長フアリ

ア・リマ氏の好意により特別にビラマリアナ墓地を提供される等、邦人よりもブラジル人間においてその功績を認められた次第でした。

当日、サンパウロ州議會は特別動議として翁のために哀悼の意を表する等、未だかつてなき邦人において最上の榮譽を与えられたのであります。

これは親しく翁から聞かされた話ですが、翁は青年時代、靈南坂教会において故小崎弘道牧師から洗礼を授けられて信者となり、その信仰は一生を貫いて翁の自由思想の根本となり、外交官生活の上に伯国においての日伯親善に於いても翁の人生指針となつたものと思ひます。

六月十五日、翁の告別式および埋葬式は翁の生前からの遺言により同志社校友によつて行われることとなり、司式を大橋サンパウロ支部長、聖書朗読を畑尚文校友、説教をサンパウロ市在住の校友会先輩、湯浅十郎牧師がつとめられ、讃美歌もまた列席の校友諸兄弟によつてしめやかに歌われ、日本政府代表として駐在サンパウロ総領事・近藤総領事、またブラジル政府を代表して日系州議員・京野

四郎氏のそれぞれ弔辞あり、在日のご子息たちの弔電や駐在大使の弔電の朗読あつて、午前十一時ビラマリアナ墓地に埋葬されました。

その他、校友寺阪昌也君、清水尚久君、とくに清水君のごとく平常から父親のごとくして居られたくらいにて、この度は寢食を忘れてお世話をせられたくらいである。

翁のごとくキリスト教信仰をもつて一生を貫き植民の先達としてその栄光ある生涯を全うせられたことは私たち同志社校友会として最も誇りとするところであり、その海外発展の模範とすべきで、特にこの際、母校同志社学生諸君ならびに校友会の皆様方にかくも優れた先輩をもつわれら同志社校友会は、今少し暇を海外に向け、特に理想的植民、移民の新天地としての当ブラジルを研究され、故古谷重綱翁の先駆者としての死を土台として大いに発展せられんことを望むものであります。

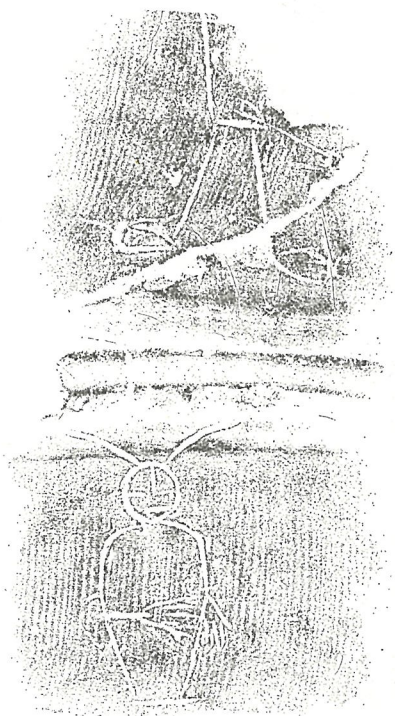
(校友・校友会サンパウロ支部長)

馬山の原始絵画

—佐伯義男氏寄贈の考古学資料—

森 浩 一

馬山古墳出土の埴輪に描かれた古代人



1
昨年の五月、本部からの連絡があつて校友の佐伯義男さん（本年三月死去）から考古学の遺物の寄贈をうけたから、現物を見たうえで文学部の考古学実習室へ保管してはどうかとのことであつた。早速、本部へうかがつて拝見したところ、お菓子箱大の紙箱一個と納屋にでも長年置かれていたような埃まみれの蜜柑箱大の木箱二個とであり、木箱には蓋もなく、雑然とつめこまれた縄文土器の破片や石器と一緒にぼろぼろになつた紙きれが混じつてゐる状態で、内心それほどの期待はできないと思つた。部屋にもどつて礼状の目録に品名や数量をのせる必要があるのに、埃をはらいながら整理をはじめると、二つのことに気付いて次第に緊張しはじめた。それは遺物の大部分が日本のものではあるが、ヨーロッパ、おそらくイギリスの旧石器が若干混じつてゐること、変色した紙きれにはどれも達筆な英語で遺物名をしるしてゐることで、日本人が集めた遺物とするにはどうも合点がない。

翌日から、ぼろぼろの紙きれを伸したり、

継ぎあわず作業を始めた。その結果、この紙は横浜のホテルの用箋を五つほどに切って使っていることがわかったし、また遺物を包むために使われていた新聞の日付が明治の末年のものであることもわかった。明治の末年、横浜、イギリス人らしい外人、この三つの条件を満たす人となると、それは著名なイギリス系の帰化人マンロー (Neil Munro) しかない。マンローは、医者として来日したが、考古学に造詣が深く、明治四十年に横浜で、『先史時代の日本』(Prehistoric Japan) という大冊を出版した人であり、この書物は日本の考古学を旧石器時代から書きおこした最初の体系的な概説書である。しかし、この出版は彼が専門家でないためであろうか、意外と反響が少なく、それが原因かどうかは確かめられないが、その後間もなくマンローは考古学界から姿をけているのである。それからマンローについては北海道のアイヌ部落で施療をかねてアイヌ研究に従事し、昭和十七年に八十一歳の長寿で世を去ったという程度しかわからない。つまりマンローは、明治時代に活躍した三人の外人考古学者、大森貝塚を発掘したアメリカ人モース、古墳の研究をし

たイギリス人ゴーランドとともに不滅の功績をのこした人なのであるが、民間学者であったために詳しい伝記すら知られない謎の学者なのである。

佐伯さんが寄贈して下さった遺物が、思いがけなくマンローの蒐集品らしいことがわかったので今度は遺物を一つずつ調べてみた。すると、消えかかっているが、朱でマとか、マンローと書いた石器や土器片が約百個もあって、中にはマンローの自筆と推定されるメモを書いた紙片で包んだままの遺物も数点あらわれた。そこで佐伯さんにお尋ねすると、マンロー夫人から佐伯さんの先代がゆづられたものであることがわかった。マンロー夫人は、満郎千代といって現在は神戸に住んでおられるとも聞かすがはつきりしない。このように意外のことで、マンローの蒐集品を大学は入手することができたが、おそらくマンローの考古学関係の遺品としては唯一のものであり、日本の考古学発達史の貴重な資料となったのである。

戦後の考古学では、群馬県岩宿での最初の発見が契機となつて、日本列島にも旧石器文化が存在したことはすでに常識となつてい

る。しかし、そのことを最初に予言したのは実はマンローであり、彼は『先史時代の日本』の中に神奈川県早川流域採集の石器の写真をのせて、日本にも旧石器文化があったことを報告している。しかし、マンローのこの研究は戦前はもちろんのこと日本に旧石器文化の存在が確実となった最近でも否定されつづけているのである。ところがマンローの蒐集品には日本で採集したらしい二個の旧石器があつて、それが『先史時代の日本』に掲載されている早川流域採集品によく似ているのである。もしこの石器がたしかに早川流域のものであれば、今までのマンローにたいする評価はあやまっていたことになるのである。

佐伯さんから頂いた資料には、このほか朝鮮の慶州採集の石器約五十個がある。打製と磨製の石斧が大部分で、一点だけ農耕用の收穫具である石庖丁がある。この一括採集品は日本の弥生式文化の石器との比較のうえでたいへん役立つものである。このほかもう一つ貴重な資料があつた。それは鳥取県橋津町馬山古墳で大正十二年頃出土した円筒埴輪の破片である。縦約二十五センチ、横十六センチほどの破片であるが、その中央に一本の凸帯

があって、それをはさんで上下に二人の人物を竪で描いている。下の人物は足を失っているが、頭に長い羽根状の飾りをつけ、両手の表現は庭帚のようである。上の人物は頭を失っているが、腰に刀であろうか一本の棒状のものをおび、足はしっかりとふんばっている。これは原始絵画の遺例として昭和六年に倉光清六さんが学界に紹介されてから著名な資料となっていたが、久しい間その実物がどこにあるかは不明になっていた。馬山古墳は戦後に学術調査がおこなわれた。それによって、この埴輪は普通の樹物タマシではなく、屍をおさめるための埴輪棺らしいことが確かめられた。つまり棺の表面に人物画をえがいていたのであり、たんなる戯画ではなく、葬送の儀礼の必要から描いたものと推定されるようになった。行方がわからなかった馬山の原始絵画が同志社に寄贈されたことは、学界のためにもうれしいことである。

2

同志社大学が所蔵したり保管している考古学資料、つまり遺物は数万点に達している。その大部分が大学の研究活動である踏査や発

掘によったものであり、今回のように個人からの寄贈をうけたことは余りない。最近では国立、私立ともに考古学資料購入のための予算を計上している大学も多いが、原則的にはその必要はないと考える。それよりも大学としての研究活動をおこなえる費用はぜひ確保したいものであり、考古学資料は研究活動の当然の結果として蓄積されたものこそ学問上貴重である。しかし研究活動は、故酒詰伸男博士や私に時々与えられた文部省の科学助成金や学生たちとともに費用をだしあっておこなったものが大部分であり、資金源があまりにも苦しいのである。と言って各府県教育委員会が主催する開発を前提とする行政発掘に大学として参加することには問題も多いので、できるだけひかえている。

戦後は考古学ブームだと世間では評されており、事実それまで国立では東大と京大にしかなかった考古学の講座が今では十校に設置されている。そればかりか一昨年から学問の性質上、施設、費用の面で自然科学と同じように実験講座として認められ優遇されている。私立大学でもこの方面への拡充には力を入れていくところが多く、独立の付属陳列室

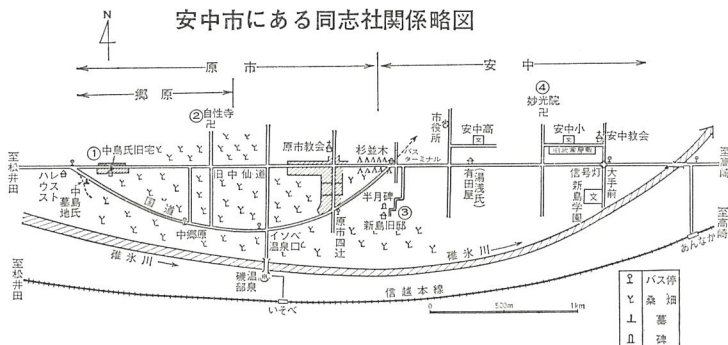
をもたない方がおかしい時代である。考古学の講座のある国立大学十校では、一学年二名前後が普通であり、明治大学や国学院大学のように講座化しているところでは一学年六、七十名くらいだと聞いている。同志社では、文化史専攻として約六百名の学生を擁し、実際上では他大学の史学科以上の内容をもちながら、文化学科の下部にあるため、施設や予算の要求では苦しい立場におかれている。これは文化学科の下にある各専攻とも同じことであろう。まして考古学は、専攻のさらに下部にあるため諸要求は熱砂に水をまくようにいずこへとなく消えていくことが多い。数名の学生のいる国立系では大学としての発掘費だけで百万円を予算化され、考古学実習を履修する学生だけでも約五十名のわが同志社ではそれがゼロであるという矛盾はどう理解し、どう対処すればよいのか。この隔差は施設、人員などの面でもさらに大きくなる傾向にあるので今の間に何とかしたいものである。

現在、同志社大学には新町校地の臨光館一階の南西隅に考古学実習室をもち、その西に独立した収蔵庫一棟をもっているがどちらも

この三月には、徳島県と香川県で平安時代の土器の窯を約二十日間発掘したが、目下その破片を実習室はもとより廊下まで並べて接合作業をすすめている。①発掘、②整理、③陳列、この三つの作業過程を実現するには費用や施設も必要であるがそれぞれに異った意義がある。以上のような現状のなかでもうれしいことは、国立等には学生が少ないという悩みをよく聞くが、同志社では発掘や整理などに自主的に参加してくれる学生が多いことは、楽しみであり、誇りである。しかしわれわれの発掘だけではいつまでも補いにくい資料がある。それは銅剣や銅鐔である。各大学とすでに銅剣や銅鐔を陳列に加えているのこれだけは何とかなり手したいものである。

(文学部助教授・考古学)

安中市にある同志社関係略図



同志社関係者 岩井文雄（新島学園長）、江川栄（安中教会牧師）、半田隆一（農林業）の各氏。